

関西支部第11回夏季大学の報告

日本気象学会関西支部主催の夏季大学は今年で11回目を迎えました。

大阪管区気象台をはじめ近畿2府4県と大阪市の各教育委員会から後援を得て、7月25日～27日の3日間に、今回初めての会場となりました公立学校共済組合「ななわ会館」(大阪市天王寺区石ヶ辻町19番12号)で開講しました。

受講者は定員100名のところ、希望者が多く113名(内訳は高校、中、小学校の教職員が全体の30%、学生3%、その他67%)にも達し、昨年に比べて受講者は約2.4倍増となりました。

受講者を地域別にみますと、近畿地方は101名(大阪府73名、京都府4名、兵庫県15名、奈良県9名、他0)で全体の約90%を占めています。この他、東は仙台市・日立市、西は福岡県・岩国市・岡山市の遠方からも参加されています。また、気象台職員(管内の広島・松山地台、津山・宇和島測候所、東管の津地台)並びに気象協会(関西本部、神戸・奈良支部)の方々も受講されました。

皆勤受講者は72%、2日間受講者は18%、全日欠席は4%でした。受講態度は真剣で、そのうえ、多くの質問も出て好評のうちに無事終了しました。

今回の全体テーマは「高層気象と天気予報」で、高層大気の動向が地上の天気とどう結びついているのか、また、それらの状態を観測しあるいは予想し、どのようにして天気予報を行なうのかを理解していただくことを狙いとしました。以下、講義題目と見出しから内容をご推察願います。

第1日目

○『天気循環の変動とその予測』

一天気予報の当たり外れを学問する一

(京都大学理学部 余田成男助教授)

- ①気象観測と解析 ②大気循環の変動 ③変動の予測
④映画2本「GMS(ひまわり)の全球画像：1987年」

「NMC 500 mb 高度場の変動」

○『高層天気図の見方』

(大阪管区気象台 飯島邦彦予報課長)

- ①大気の安定度をみる ②地上天気図と高層天気図の違い ③偏西風と南北気温差 ④偏西風帯の波動とその発達 ⑤高層天気図と地上天気図のつながり ⑥衛星画像と高層天気図の関係

第2日目

○予報実習『高層天気図と予報』

(大阪管区気象台 宮崎晴夫予報官・松本武予報官)

- ①高層天気図の解析実習 ②高層天気図の解析と予想

第3日目

○『高層の測器及び観測』

(京都大学防災研究所 村松久史教授)

- ①高層気象観測 ②気象ロケット観測 ③特殊ゾンデ
④観測資料

第3日目の午後は大阪管区気象台の予報・観測・通信現業3課の見学を実施し、90名以上の方々を終始熱心に見学されました。

毎年、受講者を対象にアンケートを実施していますが、「今回の夏季大学全般にわたっての感想・意見」の設問で、①OHPの字が小さい ②会場が少し暗い ③質問者にもマイクを準備して欲しい ④専門用語が多い ⑤時間を延長して欲しい ⑥事前にテキスト等を配布して欲しい ⑦実習はマンツーマン的で良かった。係の人が親切で良かった ⑧会場が駅に近くて便利 などの意見、希望をいただきました。

また、次回の夏季大学の開催については、回答総数80名のうち78名が開催したほうがよい、ということで全般的に好評で担当者には励みになるものです。

これらの意見を参考にし、次回以降の当講座の運営に役立てたいと思っています。

なお、今回の夏季大学開講に当たりご協力いただいた多くの方々に深く感謝します。